アイドルを取り巻くジェンダー・バイアスに向き合う

慶應義塾大学文学部非常勤講師　上岡磨奈

アイドルとジェンダー

ポピュラー音楽の中でもアイドルというジャンルは、ジェンダーとの関わりが深い。

まずアイドルと聞いてどんなアーティストを、どんな様子を思い浮かべるだろうか。「アイドル」のステレオタイプとして、女性のみ、または男性のみのメンバーで構成されたグループはイメージされやすい。またそうしたグループのメンバーが、異性のファンを対象に理想の恋人のように振る舞い、「好きだよ」「愛してる」と歌う場面も想像されるだろう。確かにアイドルのパフォーマンスにおいては、女性らしさや男性らしさが魅力として表現されることが多い。そうしたアイドルの性表現は、効果的に取り入れられている一方で、男女二元論的に映りやすく、旧態依然とした見せ方に疑問を抱く人もいるだろう。実際にはそうしたステレオタイプ的なアイドル像は多面的なアイドルのパフォーマンスにおいて一部分にすぎず、演者としてのアイドルも、ファンも、また各アーティストのコンセプトも非常に多様であるのだが、そもそもなぜアイドルには性差を強調するような演出がつきものなのか、と考える必要がある。

そして、同時にアイドルやそのファンに対して、シスジェンダーの異性愛者であると決めつけるような見方をしやすいことにも留意したい。上述のような見せ方によって、女性アイドルは女性である、男性アイドルは男性である、女性アイドルのファンは男性である、男性アイドルのファンは女性である、という思い込みが生まれる。さらに女性だから、男性だから、女性ファンだから、男性ファンだから、という固定観念にもとらわれやすい。繰り返しになるが、アイドルもファンも一人の人間としてそれぞれ別の個人であり、ジェンダー・アイデンティティ（自身の性別に対する認識）やセクシュアル・オリエンテーション（恋愛や性愛の対象についての指向）はもちろん、どのようなパフォーマンスをするか、好むか、好きなアイドルに対してどのような思いを抱いているか、はそれぞれ異なる。しかし、ステレオタイプ的なアイドル像に引っ張られてしまい、一枚岩で捉えがちになってしまう。

本稿では、アイドルの性別に基づくジャンル分けについて検討し、さらにアイドルに特徴的ともいえる性表現としての「異性装」についても触れることで、アイドルのジェンダー・バイアスに向き合ってみたい。

出生時に割り当てられた性別によるジャンル分け

実際に日本のポピュラー音楽産業において「女性アイドル」と「男性アイドル」は明確にジャンル分けがなされており、CD ショップの陳列棚や（アイドル産業では今も CD が主流メディアであり主

力商品である）アイドルが出演するイベントなどは基本的に「女性アイドル」と「男性アイドル」に分かれている。また両者がジャンルを超えて、テレビ番組や動画コンテンツ、雑誌などのメディアで積極的に協働、共演することは多くない。近年変化を標榜しているものの「NHK 紅白歌合戦」でも、明確に「性別」によって日本のポピュラー音楽を分けている。基本的に出生時に割り当てられた性別を基準にジャンルが分かれており、同性だけで構成されたグループおよびソロのアーティストがアイドルに該当すると考えられる。

なぜアイドルグループは同性だけで構成されているのか、という質問を学会などの報告の場や授業などで受けることが度々ある。男女混成のグループもあればいいのに、と言われるのだが男女混成のアイドルおよび類するグループは、実はいくつも例がある。既に解散しているグループでは清竜人 25（2024 年にメンバーを変更して再結成）、Dream5、Happy Dance、LADYBABY、DESURABBITS、絶対直球女子！プレイボールズ、すこやか健康クラブ、DAN⇄JYO、ONE BY ONE など、また現在も活動中のグループに青 SHUN 学園、lyrical School、くぴぽ、電影と少年 CQ、NaNoMoRaL、プランクスターズ、モノクローン（現在はメンバー変更）、スーパーマカロニサラダ、劇場版ゴキゲン帝国-諸行無常-、GENIC、ONE LOVE ONE HEART などがある。また男性アイドルの分野で男装アイドルとしてのキャリアを持つメンバーを含むグループなど特に男女混成であることを明示しない事例もある。混成と一言で言っても構成は様々であり、女性アイドルの分野で活動する場合、女性メンバーとは立場の異なる男性が共にパフォーマンスを行う例と、女性メンバーと同様の立場でメンバーとして活動する例に大きく二分することもできる。

例えば前者に相当する清竜人 25（2014 年結成、2017 年解散、2024 年再結成）はシンガーソングライターの清竜人を夫とした妻であるメンバー「夫人」達で構成される一夫多妻制アイドルで、ステージでは基本的に「竜人くん」がメインボーカルとしてセンターに立つ。清はプロデューサーでもあり、夫人達とは立場が異なる。他にもプロデューサーがメンバーも兼任し、ステージに立つ例はいくつかあるが、そのうちの一つであるくぴぽ（2014 年結成）の場合、まきちゃん（服部真希）はプロデューサーでありながら、ステージ上では基本的に他のメンバーと同じように出演、パフォーマンスを行う。後者の例のうち最もよく知られたグループは Dream5（2009 年結成、2016 年活動終了）であろう。2014 年にリリースしたテレビアニメ『妖怪ウォッチ』（テレビ東京系列）のエンディングテーマ「ようかい体操第一」（作詞・ラッキィ池田 ＆ 高木貴司、作曲・菊谷知樹）は、アニメの主要な視聴者であった子ども達を中心に話題となり、同年の「第 65 回 NHK 紅白歌合戦」でも披露された。

いずれのグループも活動の場は女性アイドルジャンルにあり、構成するメンバーの中で多数派となる性別がそのままジャンルと認識される、またはジャンルとして設定されるということが多いと考えられる。「女性アイドル」「男性アイドル」としてジャンル分けがなされていても必ずしも構成するメンバーの性別がジャンルに準拠するとも限らない、というのは男女混成グループの存在、また演者であるアイドル当人のジェンダー・アイデンティティについて他人は知ることがないという意味でも留意したい点である。

「疑似恋愛」とアイドル

ジェンダーと同様にアイドルは、恋愛や性愛的要素との結びつきを長らく指摘されてきた。そうした指摘においては、度々「疑似恋愛」という言葉が用いられ、観客、聴衆にとってアイドルである歌手は「虚構」の中の恋人と想定される。ジェンダー・ロールに基づく表現および演技とアイドルは、

この「疑似恋愛」に端を発すると考えられる。小川博司はアイドルを「欲望の対象」として Wink を例に、「生身の女の子に気軽に声をかけることができない、気弱な男の子の欲望の対象としてふさわしい」存在だと述べている（小川 1993：85-86）。ここでの欲望とは性愛の対象であることを意味し、アイドルは観客に対して擬似的な恋人としての振る舞いを求められるという前提が長らく共有されてきた。よってアイドルが歌う楽曲の多くもまた、恋愛的要素を含むと考えられ、聴衆の感情に訴えかけるような歌詞がアイドルとファンとの間に特別な関係性を醸成させていると論じられている（稲増 1999;濱野 2012,133-135）。

しかしよく考えれば当然ではあるのだが、アイドルの歌う歌は特に恋愛の歌詞に限定されてはいない。聴衆を鼓舞する応援歌のような曲や友情を歌う曲、アイドルをメタ的に歌う曲などもよくある。またファンが好きなアイドルをどのような想いで応援しているのかを他者が正確に知る由はなく、すべてを恋愛感情と断定することはおよそ的外れになる。しかし、アイドルはファンにとって「疑似恋愛」の対象であるという見方は依然として強い。それはアイドルと「恋人」とのスキャンダル報道とそれに対するアイドル側の対応や、アイドルの結婚に対する反応などからも明らかである。

筆者はここでいう「恋愛」は厳密には異性愛を意味していると考え、アイドルの背景にある強制的異性愛を指摘する論文を書いたことがある（上岡 2022）。アドリエンヌ・リッチ（Rich, Adrienne）の「強制的異性愛とレズビアン存在」に由来する「強制的異性愛」(Compulsory heterosexuality)は、異性愛を「正常」であり、「先天的」なセクシュアリティとする異性愛主義が強制的であることを指摘する概念であり、「一つの制度としての異性愛」は吟味されるべきであるとリッチは強く批判している（Rich 1986[1989],86）。同論文では同性ファンの存在に目を向けることや、恋愛感情ではないことを明らかにするファンの声を拾うことでアイドル論を拡張しようとするのではなく、そもそもの前提としてアイドル文化に内包された価値観を批判的に指摘した。異性愛を前提とすることで異性愛をタブー視する傍ら、異性愛以外の恋愛に対しては寛容または無視をする状態ができあがっている。

lyrical school は、2022 年 7 月に当時のメンバーが一人を除いて全員が活動を終了、2023 年 2 月から残った minan をプレイングマネージャーとして新メンバー 7 人を迎え、男女混成の新体制をスタートさせたグループだが、発表当時、グループ内での恋愛や他のグループのアイドルと男性メンバーが同じイベントに出演することを不安視し、嫌うコメントが多く寄せられたことを minan が明かしている（minan 2023）。そうした批判の声には、グループ内で同性のメンバー同士が恋愛関係を築くことへの懸念はなく、異性間であれば恋愛や性愛の対象になると疑わない偏見が浮かび上がってくる。性別によるジャンル分けの背景には、強固な異性愛主義および恋愛至上主義があるのではないだろうか。恋愛をするか否か、また恋愛感情を持つか否か、は個人的な領域にあるにもかかわらず、アイドルであれば異性愛者であり、身近な異性に対して恋愛感情を抱くであろうと安易に推測されることはアイドルに対するジェンダー・バイアスにもつながっていく。

異性装とアイドル

一方でアイドルは「異性」として振る舞う性表現とも関わりが深い。石井達朗は、祭儀や能、歌舞伎などの伝統芸能、大衆演劇、少女歌劇に見られる「＜男装／女装＞の例をみてもわかるように、日本の芸能史はトランスヴェスティズムを抜きにして語れない」と述べている（石井 1991 [2003], 19）。「トランスヴェスティズム」（transvestism）はしばしば「服装倒錯」という訳語を与えられる為、「倒錯」の持つ意味合いが現象に対して不適切であるという指摘があるが、それを踏まえ、石井

はここでは「異装」、「異性装」という言葉を当て嵌めている。これは服装による越境行為、「異性の衣類を身に着けること」を指す。服装や衣類はその人の性別を示す記号であり、日本の芸能における表現手段として効果的に用いられてきたといえよう。

「異性装」という概念を成立させる為には、そもそも演者の性別が明確に示された上で、性別を男女二元論で捉えることを前提に置きつつ、「異性」の服装を纏っているのであるということを明らかにしなければならない。アイドルに期待される旧来のジェンダー・ロールは演出としての異性装の重要な素地となり、越境行為によって生み出されるギャップを魅力として映し出す。

ではアイドルの身体について、何を根拠に「女性」「男性」の身体と決定づけるか。ジェンダー（gendar）を「社会的な性」、「文化的な性」とする一方、「身体的な性」、「生物学的な性」という表現でセックス（sex）を定義づける向きもあるが、ジュディス・バトラーは「セックスの不変性に疑問を投げかけるとすれば、おそらく、「セックス」と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたものである。実際おそらくセックスは、つねにすでにジェンダーなのだ」（バトラー1990 [2018],28-29）としてセックス、つまり身体に紐づくと考えられる性も社会的に構築されたものであると指摘している。身体的な特徴を性別の根拠とする背景について石井は、規定が存在しない為、出生時の判断に依るしかないのではないかと考えている（石井 1991[2003], 13）。パフォーマーとしてのアイドル、そして観客としてのアイドルファンにとって男性アイドルが女装を、女性アイドルが男装をすることは演出手段としてある程度受け入れられているであろう。しかし、そうした演出を単純に「異性装」と言いきるのではなく、その背景には多くの留保が求められることを念頭におきたい。

参考

Rich, Adrienne, 1986, “Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence,” Blood, Bread, and Poetry : Selected Prose 1979-1985, W. W. Norton & Company, Inc.（＝1989, 大島かおり訳, 「強制的異性愛とレズビアン存在」『アドリエンヌ・リッチ女性論――血、パン、詩。』, 晶文社, 53-119）

濱野智史, 2012, 『前田敦子はキリストを超えた――〈宗教〉としての AKB48』, 筑摩書房.

稲増龍夫, 1999, 「SPEED にみるアイドル現象の変容ー「異性愛」から「自己愛」へ」 ,北川純子編, 『鳴り響く性―日本のポピュラー音楽とジェンダー』, 勁草書房.

石井達朗, 2003, 『異装のセクシャリティ：人は性をこえられるか　新版』, 新宿書房.

上岡磨奈, 2022, 「アイドル音楽の実践と強制的異性愛:「二丁目の魁カミングアウト」が歌う「愛」と は何か」,『ポピュラー音楽研究』第 25 号, pp.39-53.

minan（lyrical school）, 2023, 「いつかアイドルになる」『ユリイカ』2023 年 5 月号　特集＝〈フィメールラップ〉の現在, 青土社.

小川博司, 1993, 『メディア時代の音楽と社会』, 音楽之友社.

佐伯順子, 2009, 『「女装と男装」の文化史』, 講談社.